The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ガエ・アウレンティの建築思想と実践一内部空間への志向
Author(s)	櫻間, 裕子
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59399
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	櫻（さくら）　間（ま）　裕（ゆう）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４９１７　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 9 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**ガエ・アウレンティの建築思想と実践—内部空間への志向**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　藤田　治彦 （副査） 教　授　上倉　庸敬　　准教授　三宅　祥雄

論文審査の結果の要旨

本論文は、1950年代から現代に至るまでさまざまな領域で設計活動を続けるイタリアの建築家ガエ・アウレンティ（Gae Aulenti,1927- ）の「内部空間」に関する思想と実践を、おもに「新合理主義 Neorazionalismo 」の建築思潮の観点から検討し、その建築の独自性とその歴史的意義を明らかにしようとしたものである。

アウレンティは、1980年代にいくつかの重要な美術館の展示空間を設計したことで世界的な注目を浴び、「内部空間」の設計を中心に活動してきた建築家である。本研究は、このアウレンティにおける「内部空間」の重要性を、建築における「新合理主義」の観点から検証することで、各分野にまたがるアウレンティの設計の本質を確認すること試みている。

アウレンティの活動初期は、第二次世界大戦を経た後のイタリアの復興期と重なる。このような社会情勢に対応しようとするアウレンティら当時のイタリアの建築家たちは、「都市計画」を念頭に置いた建築のあり方を模索していた。これらの建築家たちは、1920年代以降に起こったイタリア合理主義建築運動の思想を基礎に思考を重ね、設計活動を展開した。このように、イタリア建築の伝統と社会の新たな発展過程を一つの視野に収めた「新合理主義」の建築は、アウレンティの建築活動においても、さらにはアウレンティの「内部空間」を検証する上でも看過すべきではない重要な歴史的背景である。

第1章では、戦後イタリアの建築運動の歴史的変遷、とりわけアルド・ロッシの建築論を再検討することで、歴史的存在としての人間が住む都市に「類型」を見出し、新たな都市環境を創出しようとする「新合理主義」の建築の形式的特徴を確認した上で、1960年代にアウレンティが設計した建築を再検討して、それが「新合理主義」の思想を実践した事例であることを明らかにした。第2章では、「プロダクト・デザイン」を対象とし、それらが室内に配される単なるプロダクトとしてだけではなく、室内建築から都市建築まで尺度を変えてもなお成立する「建築内建築」の概念的な模型としても考えられていることを明らかにした。第3章では、オルセー美術館やパリ国立近代美術館の常設展示室設計案が、新合理主義的「建築内建築」を具現化させた重要な設計例であることを示し、アウレンティが新しい近代美術館像を提出することにも成功しているということを示した。第4章では、室内と都市の二重構造を舞台空間として設計するアウレンティは、都市の中に「建築内建築」を構築することを舞台において試みているのであるということを示している。第5章では、アウレンティによってデザインされた「インスタレーション」は、インスタレーション・アートに対する「建築的インスタレーション」であることを指摘し、アウレンティにおける建築と現代アートとの接近を確認した。また、このことによりアウレンティの「建築内建築」の普遍的性格を確認し、双方の表現においてもやはり都市的視点に基づいているということを指摘した。

以上のような分析と考察に基づき、ガエ・アウレンティは、美術館や舞台空間において、「建築内建築」の設計や「建築的インスタレーション」を行うことにより、イタリア新合理主義の建築が内部空間においても実現可能であるということを証明してみせた建築家であると、本論は結論付けている。

論文審査の結果の要旨

ガエ・アウレンティは、1980年代にパリのオルセー美術館や国立近代美術館の展示空間を設計したことで注目され、さらに、展覧会設計や店舗設計、舞台設計の仕事を多く行ってきたために、室内設計を中心に活動してきた建築家であると考えられてきた。先行研究においても、そのような設計を「内側からの建築」として把握しようとする見解が中心をなしている。本研究は、このように捉えられているアウレンティにおける「内部空間」の重要性を、これまでほとんど顧みられることのなかった建築における「新合理主義」の観点から検証することで、各分野にまたがるアウレンティの設計の本質を抽出すること試みている。

本論文の最大の特徴は、アウレンティの設計活動や作品を、もっとも注目されてきたミュージアムに関するデザインだけではなく、プロダクト・デザインから舞台設計に至るまで、その全体像において捉えようとしたことにある。そのような一貫性が、新合理主義という、従来は都市計画的スケールでの建築において形成されてきた思潮を、内部空間の設計や思考にまで及ぼすことが可能となった。

著者はラヴィレット建築大学に1年間留学し、パリにあるアウレンティの代表作を時間をかけてつぶさに調べ、ミラノではアウレンティ本人に直接インタヴューするなど、徹底的に調査を行っている。アウレンティは建築の内部空間においても象徴的な構造体を配し、都市的恒常性のイメージをつくりあげようとしている。建築規模の拡大や都市環境の人工化が急速に進み、建築の内部空間が都市化し、都市が室内化する現代において、現代建築の内部空間における都市的構造に注目したこの研究が示唆するところは大きい。

以上のように、本論は、アウレンティが都市における「類型」に着目し、美術館や舞台空間における「建築内建築」の設計や「建築的インスタレーション」を行うことにより、イタリア新合理主義の建築が内部空間においても実現可能であることを示した建築家であると論じている。また本論は、現代のミュージアム空間を論じる際には必ずといっていいほど論及される「ホワイト・キューブ」の問題に十分触れながらも、アウレンティによる設計を参照しつつ、それを客観的に捉え、絶対視しない独自の観点を打ち出そうとしている。

分析の対象をアウレンティの活動の全体にまで拡大しているためか、考察と論述に粗さが見られるが、これまで装飾的レベルで、あるいは実用的・機能的レベルで専ら論じられてきた室内空間の設計と批評に、「都市」という社会的かつ批評的視点を導入したことは、アウレンティの建築設計上の業績であると同時に、それに着目し、初めて俎上に載せた本論の学術的業績でもある。以上のような理由から、本論文は、博士（文学）の学位にふさわしい学術的価値を有するものと認定する。